

# 右翼と闘った日々

塚越 衛

元戦旗・共産同

一九八六年皇居・アメリカ大使館戦闘をめぐる  
天皇制右翼との攻防をふり返る

三四年を経た今も、昨日のこのように蘇るあの緊張感に満ちた日々。このような機会がなければ、思い起こすこともなかったかもしれない。一九八

六年三・二五戦闘と、それをめぐる天皇制右翼との攻防である。情況編集部  
の依頼という機会を得て、ここに過去の記憶を呼び起こすことにした。

この八六年の権力と右翼との攻防が、どのような今日的意義を持つのかは筆者にもわからない。まして、筆者は当時と同じ思想や価値観を維持しているわけではない。それでもなお、あの攻

防を共に担ったかつての仲間や、注目していた人々に、あの闘いをふり返る何らかの素材を提供できればと考えるからである。

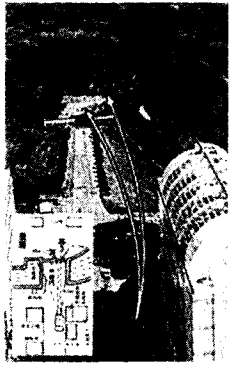
八六年三月二十五日の闘いと、  
その社会的インパクト

数日前に降り積もった季節外れの大雪が、まだ道路わきに残る一九八六年三月二十五日午後一時過ぎの都心。麹町警察署前の国道246号線に停められた無人の乗用車のトランクが突然開き、三発の火炎弾が皇居半蔵門に向

かって相次いで発射され、皇居内に着弾した。そして、発射後に乗用車は炎上した。

ほぼ同時刻、赤坂のアメリカ大使館前の路上に停められた乗用車からも同様にトランクから三発の火炎弾が発射され大使館に命中した。その時に警備に当たっていたアメリカ兵が「シェル（砲弾）だ！」と叫んだことが、新聞で報じられている。

これは、一九八六年四月末～五月初めにかけて開催される天皇在位六〇年式典と東京サミットに抗議して、戦旗・



86年3月25日 半蔵門への迫撃砲戦闘

共産主義者同盟（以下、戦旗・共産同）が敢行した作戦であった（三・二五戦闘と呼称した）。そして、この三・二五戦闘は、大きな反応を社会全体に引き起こすことになった。

まず、政府は後藤田正晴官房長官が緊急の記者会見を開き、安倍晋太郎外務大臣はマンスフィールド駐日米大使に面会して謝罪した。そして新聞やテレビは一斉に大きく報道し、ニュースショーでは、「皇居内に着弾したのは、一八六四年の『蛤御門の変』以来のことである」等と取り上げたほか、発射場の目撃者も登場して「黄色いジェット噴射が見えた」と興奮気味に語るシーンも紹介された。

儀なくされた。そして、東名高速道路港北パーキングエリアに放棄されたこの車両については、「迎賓館を狙ったものか」という報道がなされた。しかしともあれ、作戦は成功裏に行われ、社会的に大きな波及力を持った。それ故に、公安警察の反応はすさまじいものだった。直ちに捜査本部を設置するとともに、戦旗・共産同に所属する活動家に対する執拗なガサ入れ（家宅捜索）を繰り返したのである。戦旗社や各地区組織の事務所（アジト）、活動家の自宅（または実家）と職場に対して、一人につき計三度のガサ入れが行われ、それを当時の活動家は「三度ガサ」と呼んでいた。

とは言え、このような公安警察の反応は想定されたものでもあった。覚悟も準備もできていたとも言える。そして実際、三・二五戦闘に関する限り、最後まで一人の逮捕者も出さなかったのであり、完全勝利とも言えたのである。

戦旗・共産同はこの火炎弾を「M22迫撃砲」と呼称していたが、これは自噴式のロケットではなく金属筒から迫撃砲のように発射される。弾頭に自動発火式の火炎弾が装着され、後方には金属筒の径に合わせた木製の棒柄が取り付けられている。目撃者は動転してこの黄色い木製の棒柄をジェット噴射と見間違えたのである。

また、リビアの独裁者であったカダフィ大佐が、「最近のジャカルタ（日本赤軍によるものと報道された）や東京でのアメリカ大使館へのロケット弾による攻撃は、世界的な反米帝国主義闘争の一環である」と演説で述べたと新聞の国際面で紹介された（もちろん三・二五戦闘はリビアとは無関係である）。

極めつけは、いしいひさいちの週刊誌連載マンガにも取り上げられたことであろう。マンガを文章で紹介する野暮は承知の上だが、以下のようなコマである。

1コマ（おもちゃ会社で）社員「社長、ゴールデンウィーク向けの新しいおもちゃを開発しました！」  
2コマ・社長「なんだ、普通の自動車のおもちゃじゃないか」  
3コマ・社員「いえ、ほらここのスイッチを押すと」  
4コマ・トランクが開き迫撃弾がシュパシュパと発射されて、社長がひっくり返る

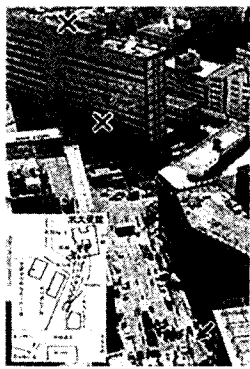
筆者が「極めつけ」と感じるのは、マンガでも取り上げられるほどの社会的波及力があったということであり、同時にそれはマンガになるほどの、ある種の「面白さ・痛快さ」を人々に与えたと考えられるからである。

もちろん、この三・二五戦闘は容易に実現できたものではない。数カ月に及ぶ血を吐くような準備が積み重ねられたし、直前に降った季節外れの大雪も作戦準備の障害となった。また、技術的トラブルで、準備した三台の作戦車両のうちの一台中を放棄することも余

このような公安警察の弾圧は想定していたが、想定外であったのが天皇制右翼の襲撃であった。これについてのクロニクル執筆が編集部からの依頼であるが、そこに進む前に、戦旗・共産同がなぜ三・二五戦闘を敢行したのかについて、その背景も含めて次章で触れておきたい。

### 中核派や革労協と異なる戦旗・共産同の武闘路線 対権力闘争で 内ゲバ党派を逆規定する

戦旗・共産同は当時、中核派や革労協と並んで「ゲリラ三派」と、マスコミでは呼称されていた。しかし、その



86年3月25日 アメリカ大使館への迫撃砲戦闘

武装闘争に対する考え方は、中核派や革労協とは大きく異なっていた。そもそもその八〇年代における武装闘争の出発点は、中核派による「党派戦争宣言」にあったのである。

戦旗・共産同とは第二次ブントの一分派であり、一九七一年から共産主義者同盟（戦旗派）を名乗っていた。一九七二年五・一二沖縄返還粉砕闘争（五・一二神田武装遊撃戦と呼称）による八〇名余の大量起訴や一九七三年西田派との分裂により、一時は全国動員で六〇〇七〇人程度の勢力にまで衰退する。その後、狭山闘争や三里塚闘争で一定程度の勢力的復活を遂げ、一九七八年の三里塚空港開港阻止決戦においては、第四インターや共産党（プロ青同）とともに二月横堀要塞戦と三・二六管制塔占拠闘争を担う。そして、一九八〇年代初頭に党名を戦旗・共産主義者同盟に変更した。

このように、ある意味では順調に復活の道を歩みつつあったが、大きな転

換点となったのが八二年の三里塚闘争の分裂である。一坪再共有化運動に端を發した三・八分裂において、中核派は反対同盟熱田派を支援する第四インターと戦旗・共産同を「反革命」規定するとともに、戦旗・共産同に対しては機関紙上で「党派戦争宣言」を出したのであった（その後、第四インターの活動家に対してはテロ襲撃を実行）。

この「党派戦争宣言」に対して戦旗・共産同が取った対応が「党の武装」であった。具体的には、中堅的な活動家のアジト生活への結集と防衛体制強化であり、対権力武装闘争の本格的開始であった。また一九八四年には埼玉県蕨市に四階建てのビルを購入して、党本部である戦旗社を開設。さらにこのような状況下にあつても、大衆闘争への全国からの動員力も五〇〇人以上にまで伸長していったのであつた。

その武装闘争の特徴は、およそ以下のような点である。

第一に、中核派の内ゲバ的圧迫に対す、実際の戦闘は労働者共闘会議（以下、労共闘）や社会主義学生同盟（以下、社会学同）の公然活動を展開する大衆的組織が担い、労共闘・社会学同ゲリラ・パルチザン部隊と呼称した。実践的には軍事における代行主義を排することを重視したのであり、理論的にはマルクスが『フランスの内乱』で明確にした「コミュニンの四原則」の一つである、「全人民武装」の萌芽として位置づけようとしたのである。

このような考えのもとに、八二年よりゲリラ・パルチザン闘争を開始し、一九八五年には時限式のM22迫撃砲の開発にも成功していた。

そして、一九八六年は中曽根政権による「戦後政治の総決算」が総仕上げを迎えようとしており、その象徴的なイベントとして天皇在位六〇年式典と東京サミットが行われようとしていた。戦旗・共産同は、それ以前の党の武装への取り組みのすべての蓄積を投入して、この年を最大の決戦として迎える

して、対権力武装闘争を本格化する。これにより、容易に手出しできない関係を創出すること。つまり、戦旗・共産同を襲撃することが「権力と戦う勢力への背後襲撃になる」という政治的な関係性を創り出し、内ゲバ党派を逆規定することを目標としたのである。

その根底には、一九七〇年代の新左翼運動を覆っていた内ゲバが、日本における革命運動の低迷をもたらしているという認識があつた。内ゲバの中心である中核派も革マル派も反スターリン主義を掲げながら、スターリン主義を自分たちとは予め無縁なものとして措定してしまっているが故に、スターリン主義的政治そのものとも言える内ゲバを構造化させてしまっている。

こうした認識の下に、戦旗・共産同は一九八〇年代初頭には、スターリン主義を革命組織の内部で容易に発生する「ブルジョア思想の未克服」の問題として捉え、その「内なるスターリン主義」との闘いもまた革命運動にお

ことを決意し、機関紙『戦旗』でも宣言した。そうして敢行されたのが、三・二五戦闘であつた。

当時、「北西風が党を鍛える」という言葉が、組織内ではよく使われていた。戦旗・共産同は組織的に冬山登山に取り組んでいたが、北西風とは冬の西高東低の気圧配置がもたらす、稜線を吹きすさぶ猛烈な風のことである。革命運動における様々な困難を北西風に喩えたものだが、この八六年はそれまでとは一線を画す覚悟で革命運動の最前線に躍り出たのであつた。そして躍り出た稜線には、想像していた以上の凄まじい北西風が吹き荒れていた。それが、筆者を含むほとんどのメンバーの実感であつたはずだ。

### 「自民党筋からアジが入った」 戦旗社への右翼の襲撃と 四・二二集会

さて、本題の天皇制右翼との攻防である。当然、三・二五戦闘に対する右

ける重要な課題として位置づけていた。「反帝・反スタ」ではなく「反帝・スタ克」潮流と自称してもいたのであつたが、このような流れから必然的に内ゲバ党派を逆規定する対権力武装闘争の方向性を打ち出したのであつた。

第二に、対権力ゲリラ・パルチザン闘争によつて直接的に権力打倒を目指すという考えは取らず、政治的な攻防の環を鮮明化し、闘う人民や抑圧された人々を鼓舞するという政治目的の下に遂行するということである。強大な帝国主義と人民との闘いは『戰略論』でリデル・ハート卿が示したような「非対称的戦争」とならざるを得ない。即ち、完璧な警備によつて無傷でイベントを挙行しようとする政府に対して、そこに風穴を開けることで人民の共感を勝ち得ることができれば勝利だということである。

第三に、「公然・非公然の重層的展開」である。中核派や革労協のような戦闘部隊としての「革命軍」組織をつくら翼による何らかのリアクションは想定していたが、実際には想定以上のリアクションとなつた。

四月七日に全国愛国者団体会議関東協議会、民族革新会議などの呼びかけで新右翼から旧右翼までを網羅する四〇数団体が集まり、三・二五戦闘への報復が協議された。そこで、四月二十二日に戦旗社近くの蕨市塚越公園で戦旗社に対する「抗議集会」を開催することも決められたようである。

そして三月二十九日には日本青年社（以下、日青社）が街宣車四台で戦旗社に押しかけてくる事態が発生。これを受けて、急遽、地区労働者組織や学生組織から戦旗社防衛隊（以下、社防隊と呼称）を編成して、戦旗社前での防衛体制を取った。

具体的には、戦旗社ビル屋上にプレハブの見張り小屋を設置し、館内放送システム等を整備するとともに、二四時間交代での見張り（ウォッチ）体制を整えた。ウォッチは一人の持ち時間

が二、三時間であったと記憶する。右翼の襲撃と公安警察による家宅捜索をいち早く察知することが任務であり、同時に右翼車両や警察車両を含む不審な車を記録することも任務に含まれていた。この屋上からのウォッチ体制はその後、長期にわたたり一九九〇年代のある時期まで維持された。

また戦旗社前の路上での防衛体制は、この緊張関係の最も激しい時期のみに一、二カ月程度取られたものであった。五月十一日は、この戦旗社前の社防隊に対して右翼が刃物で切りかかり、メンバーが負傷するという事態も発生した。

そうした経緯の中で起こったのが、日青社三多摩本部による戦旗社襲撃であった。四月十八日の早朝、戦旗社に隣接する民間駐車場にダンプカーが侵入し、バックで戦旗社ビルに体当たりしたのである。何度も体当たりは繰り返され、その結果、ダンプカーは民間駐車場と戦旗社の間にあったコンク

実情から言えば、右翼団体についての情報は、当時の戦旗・共産同はほとんど持っていなかったに等しい。日青社とは、広域暴力団である住吉連合系の小林会が母体の右翼団体ということも把握していなかった。情報を収集して初めて、日青社はソ連大使館などに対し一〇〇名規模のデモを仕掛けていくことも判明した。ただ、その多くは傘下の団体や個人への経済関係による動員であり、イデオロギー的に固く結びついた構成員はそれほど多くはないと推測された。

また、日青社三多摩本部は、接近者を足音で察知するために周囲に砂利を敷き詰めた倉庫のような建物にあり、それなりの防衛体制が取られていることもわかった。しかし、先述したように、即時の武力反撃という対応は取らなかった。

そのように対応した理由は、目前の天皇在位六〇年式典と東京サミット粉碎の大衆集会・デモの組織化に全力を

リートの壁を突き破り、戦旗社の鉄筋コンクリートの壁に穴を開けた。運転した右翼活動家二名は逃走しようとしたが、途中で警察に逮捕されている。さらに、四月二十二日には、戦旗社から五〇mほどの場所にある蕨市末広公園で右翼団体共闘の集会が開かれ二〇〇人程度が参加した。これに対して戦旗・共産同は首都圏から約二〇〇人の活動家を動員して対峙し、戦旗社防衛に当たった。

このようにして、天皇制右翼との本格的な攻防関係が開始したのであった。当時は見落としていたのだが、右翼団体の共闘が形成され、戦旗社を攻撃することで、共闘関係の中で手柄を誇れる二名を上げるといふ関係が形成されていたのである。左翼の側でも大衆集会の前にゲリラ・パルチザン闘争を敢行して、その成果を大衆集会で発表する（誇る）という構図があったが、右翼の側も四月二十二日の集会前に戦旗社を襲撃して戦果を誇示するという

注ぐ必要性があったということに加え、人民の目から隠されたところで右翼との死闘に入っていくことに何のメリットも感じられなかったということがある。故に、防衛を軸として持久的戦的に対峙していく方策を取ったのであった。

しかし他方で、この天皇制右翼と戦旗・共産同との緊張関係の激化を背景に暗躍したのが、公安警察であった。具体的には、戦旗・共産同と日青社双方への謀略電話である。

戦旗・共産同に対しては、非公開の地区事務所等に闘争前日に多くのメンバーに泊まり込んでいる時間を見はからい、日青社を名乗って「これからそっちを襲撃するぞ」といったナーバス電話をかけるという行為だ。

日青社に対しては、幹部の自宅やプライベートな場所に対して、戦旗・共産同を名乗って襲撃を予告する電話を頻繁に入れたとみられる（後述）。

さらに、戦旗・共産同の名古屋の組

狙いがあつたわけである。また、この襲撃後に発売された『週刊実話』に、「自民党筋から右翼団体に『戦旗に対して何もしなくもいいのか』とアジが入った」という記事が掲載された。

公安警察による弾圧だけでなく、右翼を使ってでも天皇在位六〇年式典・東京サミット粉碎闘争を封じ込めようとする権力者の思惑が働いていたのである。

### 日青社との攻防の開始とそれに乗じた公安警察の暗躍

戦旗・共産同がこれに対して取った対応は、「防衛・迎撃」を軸にした体制の強化と、右翼団体についての情報収集である。並行して、目前に迫った四・二九天皇在位六〇年式典粉碎闘争や五・四東京サミット粉碎闘争の大衆的組織化に注力し、攻撃してきた日青社への即時の武力反撃については留保したのである。

織はシンパサイザーが大型バスを所有しており、メンバーが東京での集会や三里塚闘争に向かう際に提供を受けていた。このバスが、闘争直前に放火され全焼したのである。三・二五戦闘以前には緊張関係になかった右翼勢力がこのバスの駐車場所を把握していたと



86年4月22日埼玉県蕨市末広公園における右翼集会



86年4月29日  
天皇在位60年  
式典粉碎闘争

は考えられず、公安警察が右翼勢力に情報を流したか、直接、火を放って右翼勢力の仕業に見せかけたというのが真相であろう（この放火事件については右翼勢力からの犯行声明等は出ていない）。

捜査本部を設置しつつも、弾圧が進まないことの代償として、こうした公安警察の策謀が繰り広げられたのであった。

「シャブを打って  
待っているからな！」

### 左翼と異なる右翼の軍事観

このような公安警察の暗躍によって、日青社の側は相当にナーバスになっていったらしい。公安警察による謀略電話を戦旗・共産同からのナーバス電話だと思いついて、戦旗社にこんな電話があった。

「俺は力道山を殺した村田だ。いい加減にしろよ。やるんなら本気でやってみるぞ！」。

調べてみると、この電話の主は赤坂のクラブ「ラテンクォーター」でプロレスラーの力道山を刺傷し、死に至らしめた住吉連合の組員、村田勝志であった。当時、村田は住吉連合の幹部で日青社にも関わっていたのだが、この村田のところまで戦旗・共産同を名乗った公安警察の謀略電話がかかっていたようであり、それに苛立つての戦旗社への電話であった。

さらに、日青社の別の最高幹部からも戦旗社に電話があった。当時、戦旗・共産同は公安警察のこのような謀略電話について察知し、機関紙『戦旗』紙上で、日青社の某幹部の愛人宅にまで公安警察が謀略電話を入れている、と暴露したのであったが、その「愛人宅」というのが事実誤認であり名誉が傷つけられたという抗議電話であった。

何というか、軍事的に緊張関係にある相手に対して、「愛人宅」というのが名誉棄損である」と抗議電話をかけてくるところに、天皇制右翼の価値観の

一端が表現されているようで、左翼との価値観の違いを実感した出来事でもあった。

そして価値観の違いと云えば、その最たるものは軍事的攻防に関する考えであった。こんなやり取りがあった。

日青社・三多摩本部へ電話で探りを入れると、「早く攻めて来い。こっちは待っているんだ」との反応。「何十年でも持久戦で追及するぞ」と返したのに対して、「何十年なんてやめる。明日にでも来い！ こっちはシャブを打って待っているからな」と言う。

つまり、彼らの世界観では、このような話になるらしい。皇居を攻撃した戦旗・共産同に対して戦旗社襲撃で反撃した。今度はすぐに戦旗・共産同が再反撃して、その後に「手打ち」が行われる、暴力団の「出入り」の延長で事態の推移を想定していたのである。しかし、現実にはそのようにならないことで困惑し、長期化することで疲弊していることも見て取れた。

### 終局と後日談

日青社への激烈な反撃を期待されていたとしたら、読者の期待を裏切ることになるかもしれないが、三・二五戦闘以降、約四カ月間の対峙を経て、直接的な反撃は行われないうまに戦旗・共産同と日青社との極度の緊張関係は自然に終局した。

当時の組織内には、日青社への武力反撃を強硬に主張する世論は無かったように思う。というのも、そもそも三・二五戦闘で当初の政治目的は超過達成したというのが大方のメンバーの感覚だったからだ。しかも、天皇制右翼への武力反撃による軍事的攻防関係への突入が、先に紹介したような戦旗・共産同の武装闘争論の中に位置づくはずもない。それは面子や体裁のたぐいであり、位置づかない軍事の行使は回避すべきであるという戦略的思考が、当時のメンバーに共有されていた結果だと筆者は考えている。

ただ、天皇制右翼に対する情報収集体制や防衛・反撃体制については、日青社との攻防を通じて大きく前進していったということは言える。

ある後日談を紹介して、このクロニクルを終えたい。

八六年から何年も後のことになるが、埼玉県内に拠点を置く右翼団体が街宣車を何台か連ねて戦旗社に対する公然とした攻撃を試みてきたことがあった。しかし、その一カ月ほど後に、彼らの拠点到駐車されていた四台の街宣車が何者かによって持ち去られ、荒川に沈められているのが発見されたのであった。そしてその後、天皇制右翼による大きな敵対行動は見られなくなったのである。